

橋の伝承に関する一考察

— 東京の橋を例として —

A Study on Tradition of Bridges — Case Study of the Bridges in Tokyo —

（環境アセスメント研究室 正会員 昌子 住江）

By Sumie Syoji

概 要

橋姫、橋占、橋参りなど、橋に関する伝説や行事は数多い。これは、橋が川に隔てられた二つの土地を結ぶ施設であると同時に、こちら側と向こう側（この世と異界）、橋上と橋下（地上と地下）という異なる世界を媒介する両義的な空間と考えられてきたことによるものであろう。

これらの伝承の内容および変遷過程を分析することにより、文書、記録、遺構などでは十分解明され得ない、人々の橋梁観、架橋の社会的背景その他について有益な資料を得ることが期待される。（キーワード：橋、民俗）

1. はじめに

橋は、ハシ（端）に由来するといわれ、⁽¹⁾多くは村の端、即ち村境に架設された。村境は単に地理的境界というだけでなく、精神的宗教的な境界をも意味しており、橋は異なる二つの世界を媒介する両義的な空間とされた。

柳田国男は、「橋姫」「橋の名と伝説」などにおいて、橋に関するさまざまな話を集め比較検討を加えている。橋の民俗は、境界のもつ多義的なイメージ（内と外、生と死、文化と自然……）が形になって外に現われたものであり、それは柳田民俗学の主要なテーマであった。⁽²⁾

本橋では、主として文献から、橋に関する伝承（口碑、伝説、習俗、信仰など）を抽出し分類を試みるとともに、東京の橋に関する事例を整理してその特色について検討する。さらに、民俗学における研究動向も参照しながら、土木の側からこれらの資料にアプローチする方法を検討する。

2. 橋に関する伝承の概況

さまざまな要素を含む伝承を分類するのは難しい。以下は一つの試みであり、参照した文献は文末に一括して注記した。まだ多くの伝承が残されている可

能性があり、今後それらを補足する必要があると同時に、分類にもなお検討の余地があるといえよう。

(1) 架橋に関する伝説

・設計に関連するもの 猿の谷渡りを真似たという祖谷の蔓橋（徳島県）、かきもちの焼ける形に似せたという錦帯橋（山口県）のように、型式選定のヒントに関する伝説。なお、山梨県の猿橋にも猿の谷渡り伝説があるが、これは肱木橋だから構造が違う。橋名からの連想と思われる。

・施工に関連するもの 弘法大師または土地の漁師が海岸から沖合の大島へ一夜のうちに橋を架けようとしたが、鶏が鳴いたので中止したという橋杭岩（和歌山県串本町）、埼玉県坂戸町、徳島県橋町にも橋杭岩伝説がある。施工に関連しては、人柱伝説も多い。最も有名なものが、神道集「橋姫明神事」にある長柄橋であろう。また渡内橋（綿打橋）（徳島県）能登塩橋（福井県）、松江大橋（島根県）などに人柱伝説が伝えられている。

・誰が架設したか 行基、弘法大師（祖谷の蔓橋にもそれぞれによる開基伝説がある）といった僧侶、あるいは今昔物語「久米の岩橋」の鬼神、合羽橋のカップのように異界のものの話が伝えられている。

(2) 架橋後における伝説

・橋姫 橋を守る神として信仰されてきた姫神（橋姫）は各地にあるが、⁽⁴⁾古くから名のあるものは宇治の橋姫と長柄の橋姫であろう。本来男女二神であった境の神が、複雑な変遷過程を経て女神のみになったと考えられる。⁽⁵⁾橋姫は各地とも嫉妬深いとされ、嫁入りにその前を通ってはいけないとか、舟で橋の下を通らなければならないなどと言いつづられている。

・橋の女 橋に現われた女が旅人になにかの依頼として他の橋の女にそれを伝えてくれるように頼む、そして旅人がそれを果す間に怪異が生じるという話は、今昔物語巻27の勢田橋や山梨県の国玉橋などに伝えられている。鎌倉の夷堂橋では幼児を抱いて現われるが、橋の神が安産や子供の成長を司るところに由来すると考えられる。

・その他の怪異譚 橋の上を亡者が通るがタガタ橋（岐阜県小坂町）のように、異界のものが橋を渡る話、あるいはアズキトギや橋地藏のような橋下の怪に関する話が伝えられている。橋地藏は石橋の下にあり、勝手にかけかえる凶事をおこすといわれる例（滋賀県木之本町）などは、架橋との何らかのつながりを考えさせる。

なお、異界との境界としての橋を示す話として、二上山の男神への人身御空を置いたまないた橋（高岡市）の例がある。

(3) 行事・習俗

・民俗儀礼 産育や季節交替において、橋を渡る儀礼がある。生まれて間もない子とその母親は、橋を渡れないという習俗が各地にある。⁽⁶⁾生まれたばかりの子供は、まだこの世のものともあの世のものともつかない不安定な状態にあると考えられていたためである。

橋参り、橋渡し、橋越しなどといって、生後7日目に橋三つを渡ると（栃木県田沼町、川越市、神奈川県津久井町など）、後はどこへ連れて行ってもよいとされた。川越市の例では石橋を三つ渡るが、これは石の固さにあやかっただけと思われる。

子供に関連しては、夜泣止めのために、橋の高欄を削って子供に見せるといふ習俗もある（静岡市、京都府美山町など）。

季節交替の儀礼としては、佐渡両津市での12月1日の橋参りがある。この日、橋を渡って茄子と餅と

食べれば、風雪の難をのがれるという。

・宗教儀礼 橋は浄土から仏たちが現実の世界に來迎する道でもある。奈良県当麻寺の練供養では來迎橋が渡され、25菩薩の面と装束をつけた人々が、この橋を渡って娑婆堂に來迎する。同様の行事として世田谷区九品仏のお面かぶり、京都泉涌寺即成院の練供養がある。

また、水死者の霊をまつる行事として橋供養がある。

横浜市南区にある道慶橋では、架橋の中心となった僧道慶をしのんで、今でも毎年道慶地藏尊の祭礼が営まれている。⁽⁷⁾恐らくはまれな事例であろう。

橋の渡り初めは今日でも広く行われ、三代の夫婦を先頭にして渡る例が多い。柳田国男は近世の習俗として、「美しい女を盛装させて、その夫がこれにつき添い、橋姫の社に参詣することが、伊勢の宇治橋などにあった」⁽⁸⁾と書いている。

岩手県紫波郡などでは、12人の子を持った者が渡り初めをさせられ、親子14人のうち必ず誰かが死ぬという話が残っている。死んだ者が橋のたましいとなり、橋が丈夫になるという人柱伝説の一種であろう。

・橋占 朝または夕、橋の下に潜んで上を通る人の話声を聴き、あるいは橋に立って行人の言葉を聴いて吉凶を占う習俗が古くからあった。

橋占では、京都の一条戻橋が名高い。石上堅の「日本民俗語大辞典」では、「『もとおり 一 行ったり来たりする』そして神意を問う古法であったのを訛って、『戻り』といった」としている。即ち、橋は神々の行き逢う場所でもあった。

高山市のみそ買い橋（筏橋）には、夢のお告げに橋に立ち、人の話を聞いて長者になる話が伝わっているが、橋占にも関連があるものと思われる。

3. 東京の橋にみる伝承

表1は、東京の橋にみる伝承の一覧である。参照した文献は文末に列記した。概要はそれぞれの内容を要約したものであるが、さまざまな要素を含む事例では、スペースの関係で内容を割愛したものもある。⁽¹⁰⁾

表1の32橋36件を地図上にプロットしたのが図1である。未調査の文献も多く、また今回は実施でき

なかったが、地元での聴き取り調査を行えばさらに事例のふえる可能性もあるので、これだけから東京の橋における傾向を即断することはできない。ただ、一応これらの事例をもとにして地域的分布の特色をみると、江戸の町の周縁部と隅田川の両岸とに分けることができる。

周縁部に伝わる話には、妖怪譚や神威譚が多く、橋が異界との境をなすことを象徴しているといえよう。隅田川の両岸に伝わる話には妖怪譚もあるが、日常性のある話もあり(No.23)境界性はそれ程強調されていないようにみえる。しかし、No.29～32のように歌舞伎の舞台となった場合(これを伝承に含めることには問題があるが)、ほとんど殺害の場面がからんでいることから、橋が生と死との境界の意味を持っていたことは想像できる。

No.10～12は、橋と庶民信仰の一端を示している。かつては墨田区、江東区一帯でも、死者(ことに水死者)の霊をまつる川施餓鬼が行われていたが、今日ではほとんどみることができない。昭和59年に高橋(江東区)の川施餓鬼が復活し、話題を呼んだ。

これまで調べた範囲では、東京の橋に関する行事は非常に少ない。「東京都民俗地図」— 東京都緊急民俗文化財分布調査報告書 — (昭和55年3月東京都教育委員会)でも、橋に関する行事や習俗は報告されていない。産育儀礼としての橋参りも、多摩地区の一部でみられたと聞くが現在は行われていない。

その年の吉凶を占う千住大橋の綱引きは、「東都歳事記」に記されているが、江戸期のうちに廃止されてしまった。なお、最近この行事を復活させようという提案が、荒川区の青年団体からなされた。⁽¹¹⁾

橋に関する伝承は古いものばかりではない。No.7白鬚橋の例は、大正初年、同橋架橋により生業を奪われた渡船の船頭さんが流したうわさだといわれている。⁽¹²⁾

4. 今後の課題

荒唐無稽にもみえる民俗事象をどうとらえるか。この点に関して、民俗学における二つの研究を紹介する。一つは、人柱伝説に技術的側面からの検討を加えた若尾五雄氏の研究である。「橋と人柱」の中で、「この話は長柄橋を架けるにあたり、岩某が袴

継ぎの工法を提唱し、その工法(人柱)が採用され、橋が滞りなくできあがったということであるに過ぎない。」⁽¹³⁾、即ち架橋技術者追慕の話だとしている。その当否はともかく、「その土地の人に、固く、その伝説を信じせしめたのは何かの事実がその中にかくされているに相違ない。ことに河川、架橋は物に関連している。従って文芸だけでなく技術面からも考える必要がある。」⁽¹⁴⁾との言は至当といえる。

もう一つは、河童に関する小松和彦氏(大阪大助教授)の論考である。「(大工の棟梁たちが…引用者注)人手が足りないので薬人形あるいは土の人形、鉋屑の人形をつくって働かせ、終わったあとにそれを捨てた人形が河童になる……つまり河童は大工の手伝い、治水工事の手伝い」⁽¹⁵⁾であって、そのイメージの背後には、土木や建築、治水工事に従事する「川の民」の姿がみえると述べている。

本稿は、橋に関する伝承の収集と分類の緒についたにすぎず、土木史における位置づけも十分に検討されていない。「伝承の暗示する実在」を明らかにするためには、まず一層の収集と分析に努めることが必要であると考えられる。

謝 辞

本稿については、鹿島財団昭和59年度研究助成「橋および橋詰広場の景観・空間形成に関する研究」の研究費より一部援助を受けた。またとりまとめに関しては、「東京の橋研究会」の会員諸氏に御教示いただいた。ここに深く感謝の意を表したい。

注

- (1) 石上 堅、「日本民俗語大辞典」、桜風社 P. 1037, 昭和58年4月
- (2) 飯島吉晴, 村境と橋, 自然と文化, 1984 夏季号, 日本ナショナルトラスト, P. 38, 1984年6月
- (3) 中国の趙州橋にも、鶏の鳴くまでに作るという話がある(金受申, 川瀬正三訳, 「北京の伝説」, 角川選書, P. 264, 昭和53年12月)
- (4) 矢代和夫「ながらの橋姫」(『境の神々の物語』所収)によれば、橋姫明神の神職として橋姫家が現存するという。
- (5) 矢代和夫, 「境の神々の物語」, 新読書社, P. 37～38, 1972年6月
- (6) 奈良県天理市, 滋賀県信楽町など
- (7) 「普門院藏古記」の道慶地藏尊由来によれば、架設は万治元年である。なお地元には道慶地藏尊奉賛会があり、年間の行事を行っている。
- (8) 柳田国男, 「橋姫」(『一目小僧その他』所収), 角川文庫, P. 161, 昭和49年1月

- (9) ライン川のコブレンツの橋にも同様の話がある。(阿部謹也、「中世の星の下で」、影書房、P. 141～142 1983年7月)
- (10) 例えば淀橋の中野長者や猫また橋などは、因果応報が説かれてかなり長いものである。
- (11) 毎日新聞昭和60年4月23日付
- (12) 毎日新聞昭和32年6月11日付
- (13) 若尾五雄, 橋と人柱, 自然と文化, 1984夏季号, 日本ナショナルトラスト, P. 45 1984年6月
- (14) 同上, P. 43
- (15) 小松和彦, 新しい妖怪論のために, 創造の世界, 53号, 小学館, P. 21, 1985年2月

2.の参考文献

- (1) 「総合日本民俗語彙」第3巻, 平凡社, 昭和30年12月
- (2) 日本民俗学大辞典
- (3) 「定本柳田国男」第2巻, 筑摩書房, 昭和37年3月
- (4) 上田篤, 「橋と日本人」, 岩波新書, 1984年9月
- (5) 自然と文化, 1984夏季号

3.の参考文献

- (1) 武田静澄, 安西篤子, 「東京の伝説」, 角川書店, 昭和52年2月
- (2) 宮原秋男, 「本所どぶ板談義」, 下町タイムス社, 1980年4月
- (3) 佐藤隆三, 「江戸伝説」, 坂本書店, 大正15年5月
- (4) 佐藤隆三, 「江戸の口碑と伝説」, 郷土文化社, 昭和6年10月
- (5) 吉井武平, 「大東京獵奇」, 亀甲堂, 昭和10年2月
- (6) 中村 博, 「東京の民話」, 一声社, 1979年6月
- (7) 石川悌二, 「東京の橋」, 新人物往来社 昭和52年6月
- (8) 毎日新聞, 「橋」, 昭和32年4月12日～7月22日

表1 東京の橋に関する伝承

No	橋名	地域	概 要	出 典	分類
1	淀橋	新宿区	中野長者が黄金の盗難を恐れ、橋の袂で下男を殺した（「遊歴雑記」）	東京の橋	B
2	〃	〃	浪人が黄金の入った壺を埋めた後、近にいた農夫を殺した（「観音聖験記」）	大東京狐奇	B
3	面影橋	〃	中野長者の娘が淀橋より投身し、死骸がこの橋の袂に上った	江戸の口碑と伝説	B
4	〃	〃	明応年間、高田附近に住む武士の娘が戸姫が投身した	〃	B
5	弁橋	港区	白銀長者の息子と渋谷長者の娘が橋を渡そうとした時、鬼が出た	東京の橋	C
6	二枚橋	小金井市、府中市	庄屋に殺された貧農の娘の霊が大蛇に化し、通行人に祟った	東京の伝説	B
7	白鬚橋	台東区、墨田区	大正年間に、夜になるとかわうその化けた美人が現われるといわれた	毎日新聞「橋」	B
8	美倉橋	台東区	橋の袂の酒屋の主人が鬼熊と呼ばれる力持ちであった	〃	C
9	甚内橋	〃	幸坂甚内という悪党が橋の袂で打ちとられた	東京の橋	D
10	烏越橋	〃	幸坂甚内は後に瘧病の神となったが、平癒した者はこの橋より供物を投ずる	〃	D
11	常盤橋	世田谷区	吉良氏の妻、密通のため殺害されるが、その霊が瘧病の神となる	江戸砂子	D
12	与力橋	文京区	甘酒を手向けて拝むと咳がなおる	東京の橋	D
13	鮫河橋	新宿区、港区	家康の持つ鮫馬が死んだ後、その霊がここに止ったといわれる	御府内備考	C
14	蛇橋	足立区	洪水から村を救うため対岸の堤を切ったため殺された名主の霊が蛇となった	毎日新聞「橋」	C
15	三之橋	墨田区	水野十郎左衛門が殺した白狐をまつよ玄徳稲荷がある	江戸伝説	C
16	猫また橋	文京区	貧しい母子に質屋から小判を運ぶ猫が、質屋に見つかって殺された	大東京狐奇	C
17	〃	〃	猫股とは狸やむじなの類の化け物であるが、実際は根っ子橋である	東京の橋	F
18	亀甲橋	品川区	橋上の亀の子と取って売っていた権助に亀のたたりがあった		C
19	合羽橋	台東区	合羽屋喜八の治水工事で出水が止まり、徳を慕って近くの橋を合羽橋とした	史跡をたずねて	A
20	妻恋橋	文京区	この橋でこうぶ人はう年以内に死ぬといひ伝えられる？	江戸砂子	F
21	日本橋	中央区	大名行列を止めた橋番の金六	東京の民話	F
22	〃	〃	橋の上でかんだしを拾うと良縁に恵まれる等のいい伝えあり	東京新繁昌記	F
23	紙洗橋	台東区	浅草紙の冷える間を、職人が吉原をのぞいて「ひやかし」の語源となる	台東区の歴史散歩	F
24	下頭橋	板橋区	橋の袂にいた乞食の死後、残された金で橋をかけかえた	東京の伝説	A
25	別れの橋	文京区	太田道灌領地のさかい、追放者が身内の者と別れた場所	江戸砂子	F
26	泪橋	品川区	鈴ヶ森刑場近くの橋、処刑者が身内の者と別れた場所	東京の橋	F
27	黒亀橋	江東区	河竹黙阿弥作「梅雨小袖昔八丈」髪結新三殺しの場である	毎日新聞「橋」	E
28	隆慶橋	新宿区、文京区	水野十郎左衛門に殺された幡随院長兵衛の死体が流れついた	東京の橋	E
29	天王橋	台東区	河竹黙阿弥作「双蝶色成曙」天王橋の仇討	隅田川の兩岸続・上	E
30	赤羽橋	港区	「勧善懲悪観機関」（村井長庵春雨傘）殺しの場	東京の橋	E
31	駒形橋	台東区、墨田区	「黒手組曲輪達引」黒手組の助六が仇を討つ	〃	E
32	両国橋	中央区、墨田区	「舟打込橋間白浪」「江戸育御祭佐七」「花街模様色縫」	〃	E
33	岩井橋	江東区	「四谷怪談」でお岩のお化けが登場する	〃	E
34	琵琶橋	文京区	盲目法師が琵琶を負ったまま橋から落ちて死んだ	御府内備考	C
35	高橋	江東区	川施餓鬼、一時途絶えていたが昭和59年に27年ぶりに復活		D
36	千住大橋	荒川区、足立区	綱引 江戸期にすでに途絶えていた	東都歳時記	D

(分類 A:架橋に関する伝説 B:橋姫、橋の女系の伝説 C:その他の伝説 D:信仰、習俗
E:歌舞伎の舞台 F:その他)

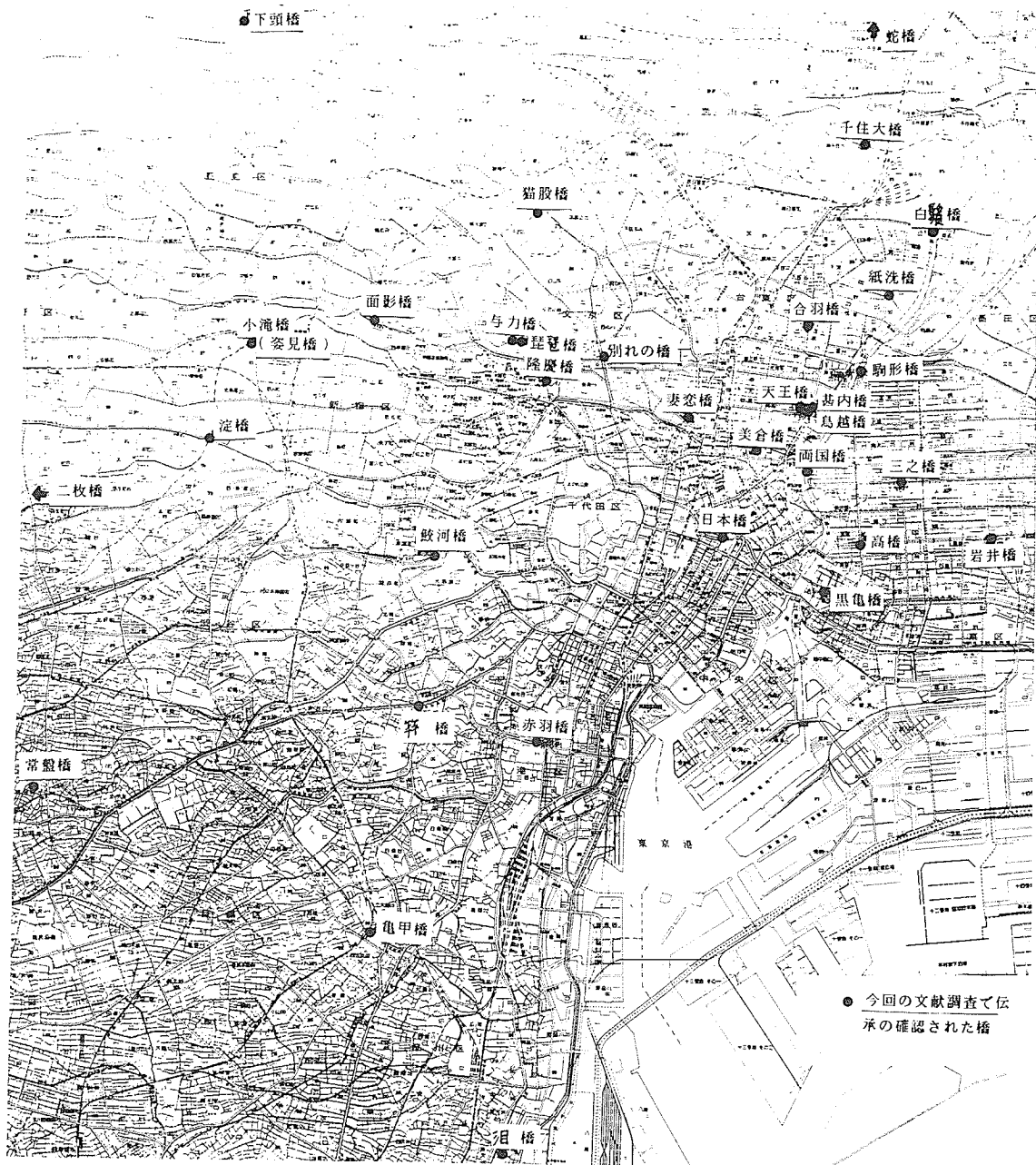


図1 東京の橋に関する伝承分布図